

平成 28 年 3 月 31 日

平成27年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する（ ）に ○を付ける	・海外共同（ ） ・共同研究（○） ・個人研究（ ）	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部 教授 北川公子	
研究課題名	看護学部専門科目「総合技術演習」における客観的臨床能力試験（OSCE）導入の効果と課題	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
北川 公子 西 留美子 佐野 望 甲斐 恭子	看護学部、教授 看護学部、講師 看護学部、講師 看護学科、助教	調査スケジュールの調整、総括 質問紙の作成、データ分析 インタビュー内容の検討、インタビューの実施・分析 インタビュー内容の検討、インタビューの実施・分析
研究期間	平成 27 年 4 月 1 日 ～ 平成 28 年 3 月 31 日	
海外共同研究を実施することになった経緯（海外共同のみ）		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書		

研究実績の概要（1）

1. 目的

本研究の目的は、看護学部3年次の「臨床総合演習Ⅰ」において実施される客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination、以下OSCE）を受けた学生の、OSCE前後、および半年後の看護実践能力の自己評価の比較検討から、OSCEの効果と課題を明らかにすることである。

2. 方法

1) 対象者

本学看護学部において、初めてOSCEを受ける1期生（3年生）86名である。

2) 方法

（1）調査方法：OSCE施行による効果を検討するために、臨床実践能力に対する学生の自己評価等に関する無記名自記式の質問紙調査を、①OSCE前（1回目：2015年5月26日～6月8日）、②OSCE後（2回目：2015年8月6日～9月30日）、③OSCEから半年後（3回目：2015年12月18日～2016年1月22日）の3時点にて実施した。

（2）調査内容：1回目調査では基本属性のほか、基礎看護学実習Ⅱで体験した技術項目、基礎医学系科目・看護学専門科目に対する選好度、臨床実践能力の自己評価15項目（4.できる、3.おおむねできる、2.あまりできない、1.ほとんどできない、の4段階）等であり、2回目、3回目ともこの臨床実践能力の自己評価について回答を求めた。

（3）分析方法：自己評価を中心に、OSCE前後の比較を行った。

3) OSCEの実施方法

平成27年度のOSCEは、入院患者と病室環境を設定した試験課題2題（うち1題には模擬患者を設定）、各試験時間5分にて、2015年8月5日に実施した。学生は、2015年4月より、2回の全体講義、実習室での自主練習、OSCE前の直前演習を通してOSCEに向けた準備を行った。

4) 倫理的配慮

研究計画、並びに自由意思の保証、匿名性の確保、成績等への影響はないことなどを書面にて説明し、同意を得るとともに、本学研究倫理審査委員会の承認（承認番号KWU-I RBA#14068）を得たうえで実施した。

3. 結果及び考察

1) 回答者の基本属性

第1回目の調査に協力が得られたのは45名（52.3%）で、全員が女性、うち43名（95.6%）が20～24歳代であった。

研究実績の概要（2）

2) OSCE 前後の臨床実践能力の自己評価の比較

OSCE 施行後の第 2 回調査の回答は 17 名と少なかった。OSCE 施行前後において、各項目に対し「できる・おおむねできる」と回答した者の割合を表 1 に示した。

表 OSCE 前後での臨床実践能力に対する自己評価

項 目	OSCE 前(%)	OSCE 後(%)
	N=45	N=17
1.人の誕生から死までの生涯各期の成長、発達、加齢の特徴を説明することができる	26.2	37.5
2.実施する看護の根拠・目的・方法について相手に分かるように説明することができる	28.6	64.7
3.対象者のプライバシーや個人情報を保護することができる	95.3	100.0
4.対象者の選択権、自己決定を尊重することができる	92.9	100.0
5.対人技法を用いて、対象者と援助的なコミュニケーションをとることができる	69.1	76.4
6.対象者に必要な情報を対象者に合わせた方法で提供することができる	52.4	82.4
7.対象者からの質問・要請に誠実に対応することができる	52.4	88.3
8.健康状態のアセスメントに必要な客観的・主観的情報を収集することができる	69.1	52.9
9.計画した看護を対象者の反応を捉えながら実施することができる	67.5	76.5
10.計画した看護を安全・安楽・自立に留意し実施することができる	73.8	88.3
11.看護援助技術を対象者の状態に合わせて適切に実施することができる	59.5	82.4
12.慢性的経過をたどる人の病態と治療について説明することができる	11.9	31.3
13.リスク・マネジメントの方法について説明することができる	28.6	37.5
14.治療薬の安全な管理について説明することができる	28.6	52.9
15.感染防止の手順を遵守することができる	64.3	82.3

注) 不明を除く

表 1 のとおり、15 項目中 14 項目で「できる・おおむねできる」と回答した者の割合が増加した。よって、OSCE を通して学生に、一定の臨床実践能力の向上が認められたと考えられる。しかし、OSCE 後において、「8.健康状態のアセスメントに必要な客観的・主観的情報を収集することができる」のみ、「できる・おおむねできる」と回答した者の割合が低下した。これは、今回実施した、1 課題 5 分という試験時間の中で、課題シートを読み、直接、模擬患者を観察し、瞬時にアセスメントすることの難しさを実感したためと考えられる。

4. 今後の課題

今回の OSCE では、再 OSCE を受けた学生もいたが、受験者 86 名全てが合格した。2 回目調査の回答が少なく、結果の解釈は慎重にしなければならないが、OSCE が一定の成果を収めたと考えられる。今後、自由記載等も加えた詳細な分析を行い、より効果的な OSCE 運営の一助としたい。